

保育内容「環境」における草花遊びの教育手法 — 発達心理学的な評価を通して —

Educational Method of Flower Play in Childcare Content “Environment” — Through Developmental Psychological Assessment —

岡崎善治*, 深谷博子**

Yoshiharu OKAZAKI, HIROKO FUKAYA

要約

本研究は自然豊かな岐阜県東濃地域の保育施設25園に所属する保育者115名を対象に、草花遊びに関する実態調査を行い、発達心理学的な評価という観点から草花遊びの有用性を検証することに課題を設定し、それを通じて保育現場における教育手法の詳細を明らかにした上で、保育者養成のあり方について提言することを目的とした。

その結果、クラス別では3・4・5歳児の年齢に関係なく草花遊びは比較的多く取り入れられており、おもちゃ遊び、飾り遊び、勝負遊びといった草花遊びの分類が多かった。これらの草花遊びは、それぞれの年齢や発達及び各園の実情に即した形で日常の保育に取り入れられていた。また、パーテンとピアジュの遊びの発達理論に基づく遊びの分類に基づき、それぞれの子どもの遊びの展開に関するクラス別の比較を行った結果では、多くの遊びでクラス間の差が見られなかった。どの年齢でも感覚遊びが重要視され、イメージや象徴遊びに繋がりがやすいことが示された。

キーワード:

保育内容「環境」、草花遊び、発達心理学、評価

Key words:

childcare content “environment”, flower play, developmental psychology, assessment

I. はじめに

近年、都市部では子どもが自然の中で遊ぶ機会が減少していることが指摘されている。自然環境は非日常的で多様性に富んでいるため、誕生、成長、死に至るまでの命のあり様を子どもに示してくれる。一方で、人工物と比較し、五感をダイレクトに刺激をし、身体の巧みな動きを促進し、同時に、気づき、ひらめき、遊びを発展させる等、工夫し考えるプロセスを自然に得ることができる点で、豊かな発達を促進するといわれている(白石, 1999¹⁾; 武藤, 2001²⁾)。その中でも草花遊びは、最も身近な自然環境との触れ合いを感じることのできる簡易な教育の手法であり、都市部でも施行が可能である。そのため、比較的現場で用いられ易いといえる。

また、著者らが行った保育者が草花遊びを採用するねらいに関する調査^(注1)では、「自然への畏敬」、「自然とのふれあい」、「自然への知的好奇心」、「認知能力」、「五感」、「遊びの展開」、「非認知能力」、「伝承遊び」の8つのカテゴリーが見出された。保育現場におけるねらい設定の範囲が多岐に渡っていることから、保育者が草花遊びを子どもの発達を促進する手段として多面的に有用であるとの認識が示されている(2019, 岡崎・深谷³⁾)。

一方で、田尻・林(2004)⁴⁾は、草花遊びの手法が保育者自身の過去の体験に依拠する可能性もあり、都市部で育ち就業する保育者が教育方針に沿って統一された手法を用いるとは限らないと指摘する。そのため、その手法は現場レベルでは

* 本学専任講師, ** 鎌倉女子大学短期大学部准教授

保育者の技量にゆだねられる部分が大きく、その啓発と実践力を身につける必要性が指摘されている。

しかし、保育現場で採用される草花遊びに関して、発達の評価の視点を踏まえた具体的な教育手法の必要性を示唆する研究は充分なされているとは言い難い (cf. 佐藤・藤野, 2012⁵⁾; 前迫, 2006⁶⁾; 田尻・林, 2004⁷⁾)。

そこで本研究では、新しい評価の一側面とし、草花遊びの保育における有効性を発達心理学の観点から検証するとともに、自然豊かな地域の保育現場で行われている草花遊びの実態調査を通じてその具体的な手法や発達の心理学的な位置づけを定量的に分析し、保育実践に有効な基礎資料を提供する。

Piaget⁸⁾ は知的発達に伴う遊びの過程について、感覚への刺激や身体を動かす運動がそのまま遊びになる「感覚遊び」、模倣や見立て、ごっこ、想像、空想などイメージを伴う「象徴遊び」、ルールのあるゲーム等の「ルール遊び」の3段階として認知発達の側面から理論化している。感覚遊びは生後間もなくから始まり、1歳半頃から徐々に象徴遊びが発展し、4・5歳でルール遊びが増加する。

一方、Parten (1932)⁹⁾ は2～5歳までの幼児が、仲間関係をそのように発展させるかという対人発達の側面から研究を行い、遊びを「何もせずぼんやりしている」、「ひとり遊び」、「傍観遊び」、「並行遊び」、「連合遊び」、「協同遊び」の6つに分類している (表1)。

2・3歳では「ひとり遊び」「傍観遊び」、「並行遊び」が多く見られ、4・5歳で急激に「連合遊び」や「協同遊び」が増加することを明らかにした。

これらの観点を踏まえた遊びの理論は多くの研究に活用され、保育や教育の在り方を発達心理学的な評価を含めて提言する手段として用いられている (cf. 松村, 2005¹⁰⁾, 中尾・中原, 2010¹¹⁾)。

しかしながら、これらの対象となる遊びは自由遊び等が多く、自然を対象とした特定の草花遊びに関する発達心理学的な視点を踏まえた研究はなされていない。

そのため、本研究では、全体的に自然豊かな地で様々な草花遊びの経験があると考えられる岐阜県東濃地域 (人口は、多治見市約10.9万人、土岐市約5.7万人、瑞浪市約3.8万人、恵那市約5万人、中津川市約7.8万人) の保育者を対象に、草花遊びに関する教育手法の実態を明らかにすることで、発達心理学的な評価という観点から草花遊びの有用性を検証することに課題設定した。それを通じて保育現場における教育手法の詳細を明らかにし、保育者養成のあり方について提言することを目的とした。

Ⅱ. 方法

調査対象

岐阜県東濃地域の保育施設25園に所属する保育者115名を対象に調査を実施し、回答を得た。有効回答数は、98.2%であった。対象者の内訳を表2に示す。保育者の経験年数のレンジは0-28 (M=7.41, SD=6.32) であった。なお、対象者の

表2 対象者の属性

性別			年代				
男	女	N	20代	30代	40代	50代	N
8	105	113	72	24	13	4	113
所属園			担当クラス				
公立	私立	N	3歳児	4歳児	5歳児	N	
31	82	113	41	34	38	113	

表1 Parten(1932)による遊びの種類と内容

遊び種類	内容
何もしない	遊ばずに、一か所に立っている。ぶらぶらしている。
ひとり遊び	一人で遊んでいる。他児のあそびには無関心か気づかない。
傍観遊び	他児の遊びを見ているが参加はしない。遊びについての会話をかわすこともある。
平行遊び	それぞれが個々に遊ぶが、隣同士で互いを模倣しながら遊ぶ。
連合遊び	一緒に遊ぶが、組織化されない。やりとりの中で調整はない。
協同遊び	遊びは組織化され役割分担がある。遊び仲間の意識を持つ。

うち、一部の調査項目に対する回答が欠損となっていた対象者のデータは分析ごとに除外した。

手続きの方法

保育施設に電話で調査依頼をし、受諾園のみに質問紙一式を送付し書面にて保育者の回答を求めた。倫理上の配慮を行い、調査への回答は任意であり、回答しないことによる不利益は生じないことを説明文書によって示した。本研究の手続きは、中京学院大学短期大学部の倫理委員会の審査と承認を受けた（承認番号：第29008号）。全ての統計解析には、SPSS 20.0 for Windowsを使用した。

調査内容

質問紙は、フェイスシート（性別、年齢、所属園の区分、担当クラス、保育者経験年数）のほか、以下の4つから構成された。

①所属園の環境

対象者が所属する園における自然環境の実態に関して、「自然が豊かな環境だと思いますか？」（以下、「所属園自然環境」と記述）、「子どもが草花遊びをするのに恵まれた環境だと思いますか？」（以下、「所属園草花遊び環境」と記述）と尋ねた。

1. 思わない
2. あまり思わない
3. どちらでもない
4. まあまあ思う
5. 思う

②保育者の子ども時の草花遊び経験

対象者の子ども時代における自然体験に関して、「子どもの頃、草花遊びをよくしたと思いますか？」（以下、「草花遊び経験」と記述）と尋ねた。

1. 思わない
2. あまり思わない
3. どちらでもない
4. まあまあ思う
5. 思う

③草花遊びの記述・符号化

対象者が保育によく取り入れる草花遊びについて、「過去2ヶ月間（4月からの）の担任クラスで行っている草花遊びについて、よく行うものはありますか？あれば、よく行う順にその遊びの名前を3つ記入してください（なければ空白で構いません）。また、表を見て、横の欄に当てはまる数字があれば記入してください。」と質問し、保育でよく行われる草花遊びについて最大3つの記入を求めた。渋谷・藤吉（2006）¹²⁾を参考に作成した草花遊び分類表（付表1）のうち、当てはまるものがあれば併せて数字の記入を求めた（以下、「草花遊びの分類」と記述）。さらに、分類表に基づき、著者が「草花遊びの大分類」の符号化を行い分析に使用した。保育者の自由記述で、いずれの大分類にも当てはまらないものについては著者が解釈を行い、「採集」「その他」と命名し、草花遊びの大分類に追加した。対象者によって記入された遊びの個数に違いがみられたため、その個数を「草花遊び数」として分析に使用した。

④遊びの種類

上記で挙げられた草花遊びそれぞれに関して展開される遊びの種類について「草花遊びはクラス内でどんな遊びに展開していますか？子どもたちの行動であてはまる数字ひとつに○をつけてください。」と質問を行った。

1. 展開しない
2. あまり展開しない
3. どちらでもない
4. やや展開する
5. 展開する

具体的な展開される遊びの種類はPiaget¹⁾、Parten²⁾を参考に、計18項目を作成した。そのうち12項目を「ピアジェ遊び種類」、6項目を「パーテン遊び種類」として分析に使用した。ピアジェ遊び種類の内容は、「感覚遊び（見る）」（以下「見る」と記述）、「感覚遊び（聞く）」（以下「聞く」と記述）、「感覚遊び（触る）」（以下「触る」と記述）、「感覚遊び（においをかぐ）」（以下「に

おい」と記述)、「感覚遊び(食べる)」(以下「食べる」と記述)、「運動遊び」、「象徴遊び(見立て遊び)」(以下「見立て遊び」と記述)、「象徴遊び(ふり遊び)」(以下「ふり遊び」と記述)、「象徴遊び(ごっこ遊び)」(以下「ごっこ遊び」と記述)、「構成遊び」、「ルール遊び」、「非遊び」の12項目とした。一方、パーテン遊び種類の内容は、「何もしない」、「ひとり遊び」、「傍観遊び」、「並行遊び」、「連合遊び」、「協同遊び」の6項目とした(表3)。

表3 ピアジェ遊びとパーテン遊びの種類

ピアジェ遊び種類	パーテン遊び種類
感覚遊び(見る)	何もしない
感覚遊び(聞く)	ひとり遊び
感覚遊び(触る)	傍観遊び
感覚遊び(においをかぐ)	平行遊び
感覚遊び(食べる)	連合遊び
運動遊び	協同遊び
象徴遊び(見立て遊び)	
象徴遊び(ふり遊び)	
象徴遊び(ごっこ遊び)	
構成遊び	
ルール遊び	
非遊び	

Ⅲ. 結果

草花遊び数の発達の比較

表4は保育者による草花遊び数についての結果であるが、これによると遊びの個数が最も多かったのは、個数別では3名の保育者が、クラス別では配属年齢による人数差はあるものの5歳児クラスが最も多かった。一方で遊びの個数が0個と回答する保育者も有効回答者全体の約1/4にあたる28名で、クラス別では3歳児クラスの保育者が12名と最も多い結果であった。これについては5歳児クラスの保育者も38名中10名と3歳児クラス同様に高い回答を寄せる結果であった。

保育内容「環境」の領域においては、幼稚園教育要領、保育所保育指針に示された3つのねらい

の1つ目において、「(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」^{3・4)}と明記されている。また、それらの内容^{13・14)}においても「自然」や「植物」といった言葉が記されており、草花遊びはこれらに該当する内容である。そうしたなか0個と回答した保育者が28名存在する結果であった。

表4 草花遊び数のクラス別クロス集計

クラス	遊びの個数(N)				N
	0	1	2	3	
3歳児	12	5	13	11	41
4歳児	6	6	7	15	34
5歳児	10	2	4	22	38
N	28	13	24	48	113

表5は保育者による草花遊びの大分類を分類別とクラス別で示した結果である。これによると分類別では有効回答数204のうち最も多かったのがおもちゃ遊びの74、次いで飾り遊びの46、勝負遊びの34であった。クラス別では、分類別と同じ遊びが上位を占めたが、飾り遊びと勝負遊びの順位が3歳児と5歳児クラスは4歳児クラスと異なる順位であった。

最も多かったおもちゃ遊びはクラス別では3歳児クラスが最も多くて約50%、次いで4歳児クラスが約37%、5歳児クラスは約26%であった。年齢が高くなるにつれ、活用する割合が低い結果であった。飾り遊びでは3歳児クラスが約14%、4歳児クラスが約30%、5歳児クラスは約22%で、4歳児クラスの活用が最も多かった。勝負遊びでは3歳児クラスが約16%、4歳児クラスが約9%、5歳児クラスは約24%で、5歳児クラスの活用が最も多かった。

おもちゃ遊び、飾り遊び、勝負遊びの3つの遊びにおいて、クラス別での活用実態の違いが示される結果であった。

表5 草花遊び大分類のクラス別クロス集計

クラス	草花遊び大分類(N)								N
	勝負遊び	飾り遊び	創作遊び	音遊び	おもちゃ遊び	ままごと遊び	採集遊び	その他	
3歳児	10	9	0	3	30	2	2	0	63
4歳児	6	20	1	2	24	3	3	0	65
5歳児	18	17	2	2	20	2	2	3	76
N	34	46	3	7	74	7	7	3	204

展開される遊び種類の発達の比較

図1・2は草花遊び大分類において展開される遊びの状況をクラス別に遊び種類の平均値を示した結果である。遊び種類はピアジェの12項目とパーテンの6項目であり、草花遊び大分類の8つの分類のうち、最も多かったおもちゃ遊びと7名以下の創作遊び、音遊び、ままごと遊び、採集遊び、その他については分析から除外し、勝負遊びと飾り遊びは回答数が近いことからこの2つに限定して検証を行った。

その結果、勝負遊びでは、ピアジェ遊び種類とパーテン遊び種類それぞれにおいての結果が図1の通り示された。ピアジェ遊び種類では、12項目それぞれに平均値の違いが見られ、項目別では「見る」・「触る」が3.5以上と他の項目よりも高く、「食べる」が2.5未満と比較的低い数値であった。クラス別では「聞く」・「運動」・「構成」が4歳児クラスにおいて、3歳児・5歳児クラスよりも平均値が1.0程度低く、「食べる」では3・4・5歳児と年齢が高くなるにつれ低い数値を示した。

パーテン遊び種類でも6項目の平均値の違いは見られ、項目別での平均値は約2.5～4.0未満の範囲での数値であった。クラス別では「ひとり遊び」と「傍観遊び」が3歳児・4歳児クラスよりも5歳児クラスが低く、その差は約1.0であり、「連合遊び」と「協同遊び」では、4歳児クラスが3歳児・5歳児クラスよりも低く、その差はこれも約1.0であった。

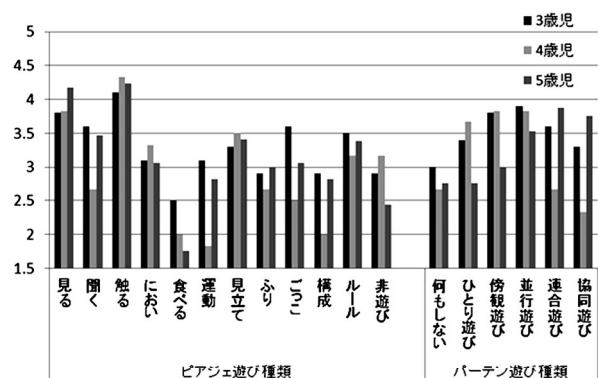


図1 勝負遊びにおけるクラス別遊び種類平均値

飾り遊びでは、まずピアジェ遊び種類を見ると、「見る」・「触る」・「見立て」・「ごっこ」が、

項目別では他の8項目と比べて、平均値が3.5以上と高い数値を示し、一方で「食べる」・「運動」は1.5～2.0程度と低い数値であった。クラス別では「聞く」・「ふり」・「ごっこ」が他の項目と比べると、平均値が1.0程度の差が見られ、その他の項目はどれも0.5未満の差であった。

パーテン遊び種類でも6項目の平均値の違いは見られ、項目別では「何もしない」以外は3.0～4.0の間での数値であった。クラス別では「ひとり遊び」と「並行遊び」はどのクラスもさほどの差はなかったが、「傍観遊び」・「連合遊び」「協同遊び」では、4歳児クラスが3歳児・5歳児クラスよりも低い数値を示した。また、5歳児クラスでは、「何もしない」が3歳児・4歳児クラスと比べると、比較的高い数値を示し、その平均値の差は0.5以上の差であった。

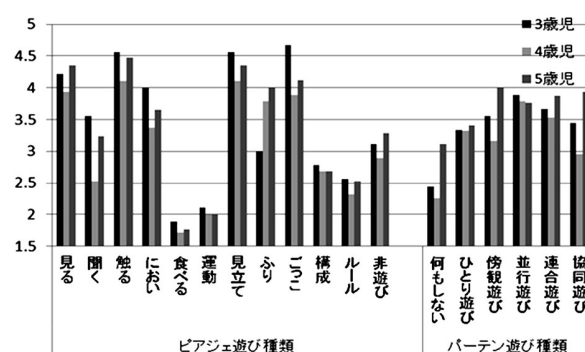


図2 飾り遊びにおけるクラス別遊び種類平均値

IV. 考察

表4の結果による保育者のクラス別草花遊び数の比較については、5・4・3歳児クラスと年齢が低くなるにつれ遊びの個数が少ない状況が見てとれたが、年齢によりその扱いや活用の仕方、程度は異なって然るべきではないだろうか。

保育用語辞典第7版では、3～5歳児について次のように示されている。3歳児(おおむね3歳)は「運動機能の発達に伴い、基本的な生活習慣がほぼ自立し、言葉での意思の疎通ができるようになる。言葉をかわず心地よさを体験し、「なぜ?」と質問するなど、知的興味や関心が高まる。」⁵⁾と、4歳児(おおむね4歳)では「全身のバランスをとる能力が発達し、身体の動きが巧みになる

とともに、自我が発達し自己主張が盛んになる。好奇心が旺盛になり、身近な自然にも積極的にかかわり、ものや動植物の特性を知りかかわり方や遊び方を体得していく。」⁶⁾とある。5歳児（おおむね5歳）は「基本的な生活習慣が確立し、園で最年長児になった喜びや誇りを感じ年下の子ども世話をするようになる。そのなかで相手の気持ちや立場を気遣っていく感受性が育まれる。」⁷⁾とし、それぞれの発達の特徴を示している。

また、幼稚園教育要領解説（2018）¹⁵⁾及び保育所保育指針解説（2018）¹⁶⁾でも乳幼児期の発達の特性に関する内容は示されている。

これらの発達の特徴を踏まえると、遊び個数が3個と回答した保育者が、5歳児クラスで最も多く3歳児クラスで最も少なかったのは、ある意味自然なことではないかと思う。

一方で、遊び個数が0個と回答した保育者が5歳児クラスで10名（約26%）、3歳児クラスで12名（約29%）であったことは、5歳児クラスでは、自然の多い地域であっても草花遊びより、その時期その年齢で必要な遊びや活動を優先させるといった園の教育・保育方針に基づくものではないかと推測される。3歳児クラスでは入園後間もない園児も多く存在するため、保育者や友達との関係の構築や園での生活環境及び保育環境に慣れることに主眼が置かれ、草花遊びの展開まで至らない状況が考えられる。

表5の保育者による草花遊びの大分類を分類別とクラス別で示した結果では、分類別での上位3位までが、おもちゃ遊び、飾り遊び、勝負遊びであった。付表1「草花遊び分類表」を参照の通り、一例としておもちゃ遊びでは「ササ舟」（葉の両端を折り、それぞれ2か所の折り込みを入れ、外側の切れ端同士を重ねあう。）は5歳児クラスの活動として、4歳児クラスでは「やに遊び」（樹液を指でとり、葉をむしった後、ねばねばさせて遊ぶ。）、3歳児クラスでは「シャボン玉」（1本の葉を輪にして先をさし、シャボン液をつけて吹く。）などがそれぞれのクラスでの活動例として考えられる。

では、これらの具体的なかかわり方についてはどうか。3歳児クラスの「シャボン玉」は、保育者が3歳児のいる前で実際に作る様子を見せて、完成したら保育者が実際に吹いて見せる。その後、子どもにも体験させるといった一連の流れが考えられる。4歳児クラスの「やに遊び」は、樹液を直接指で触り、臭いを嗅いだり樹液のねばねば感を楽しんだりして遊ぶうちに、ごっこ遊びやその他の遊びにも活用し、さらに違う遊びに発展していく流れが推測できる。5歳児クラスの「ササ舟」は、保育者が作り方の説明を言葉で行い、同時に手本も示しながら手順に従って順序良く子どもと作成していく。作り終えたら実際に水に浮かべてみてササ舟の完成度を確かめる。その後は、もう一艘同じもの（1回目よりも完成度の高いもの）を作るのか、あるいは違う遊び方に展開・発展していくのかなど、様々に推測できる。

これらの活動例とかかわり方については一概にそれぞれの対象年齢がということではないが、発達の特徴を踏まえた上での解釈である。

飾り遊びでは4歳児クラスが最も多く取り入れていたが、「指輪」・「首飾り」・「かんざし」などは、再現遊び・世話遊び→みたて・つもり遊び→ごっこ遊びへと発展していく過程において、飾り遊びでの草花は、これらの遊びがより充実したものになるための材料になる。5歳児のようにはいかないうちでも感覚を重視しながら遊びを充実させていくには十分な遊びである。3歳児では難易度が高く、保育者に作ってもらったものを活用していくことや、5歳児ではごっこ遊びで草花を用いるまでもなく、それ以外の物や材料でごっこ遊びなどの遊びを充実させる方法を得ることができる状況が考えられる。

勝負遊びでは5歳児クラスが最も多い結果であったが、相撲や四つ葉のクローバー探し、じゃんけん、くじ引きなど、どれも5歳児に限らず、3・4歳児でも容易に扱えることのできる遊びである。遊びに対する感じ方や表現方法などの違いは年齢によって異なるものの、保育者が日常の保育において取り入れようと思えば、さほど難しくな

い遊びであるといえよう。

また、これら3つの遊び以外(ままごと遊び、音遊び)では、クラス別遊び種類平均値など、本稿への掲載はしていないが、データ上の参考となる事項はここで紹介しておきたい。

ままごと遊びでは、パンジーやヨモギなどを使ったジュース、グリーンティー(色水作り)が行われ、音遊びでは主に笛が作られていた。これらの遊びは、遊びへの集中化が見られ、比較的保育現場においては取り入れやすい特定の草花遊びであることがうかがえる。また、一方でこれらの遊びに関しては、年齢による偏りが見られなかったことから、どのような遊び形態であっても、発達という制限を超えて普遍的に保育にとり入れることが可能な汎用性の高い遊びであるというメリットが存在しているのではないかと考えられる。

展開される遊び種類についての発達の比較においては、遊びの偏りにより、大分類のうち「勝負遊び」と「飾り遊び」のみでの分析を行ったが、ピアジェ、パーテン遊びの分類間では様相が大きく異なる結果であった。ピアジェ遊び種類においては感覚遊び、象徴遊び、ルール遊びに大きく分類されるが、クラスの主効果はなかった。他はいずれも遊び種類のみが主効果が有意であり、いずれのクラスでも感覚遊びと象徴遊びに展開している頻度が高かった。

中野(1990)¹⁷⁾は、「遊び発達的变化の『波』」と定義をし、もの、イメージ、ルール、認知的な遊びに関して、遊び対象の発達的变化の道筋を「波」のうねりとして表現している。個々の波は、各々の対象についてそれをマスターし、自在に対象を同化できた時点(最適水準)で最頻の遊びの出現率となり、そこを境にして次第に「自動化」していくことで遊びは衰退すると説明している。色水等の「ままごと」での感覚遊びや象徴遊びは、3歳児クラスでは目新しく新鮮だが、4歳児クラスの子どもには最適水準を超え、衰退に向かう時期である可能性がある。しかしながら5歳児でまた持ち直していることが興味深い。これは、保育者のねらい(注2)通り、3・4歳児クラスを経た

5歳児クラスにおいて、「自然に対する畏敬の念」や「知的好奇心」がある程度育まれていた成果であるとすれば、いったん衰退した遊びでも、草花遊びは子どもを飽きさせない、奥深い遊びの対象として昇格した可能性があるのではないだろうか。

パーテン遊び種類においては遊びごとの特性がクラス別の遊び方に如実に現れる結果となった。いずれも遊び種類の主効果が有意であったが、加えて「勝負遊び」では遊び種類×クラスの交互作用、「飾り遊び」ではクラスの主効果が有意であった。

「勝負遊び」では、5歳児クラスでは連合・協同遊びといった人と楽しむ形態に遊びが展開しているが、3・4歳児クラスではひとり・傍観・並行遊びといった個人的に楽しむことが中心となっている。

「飾り遊び」では、5歳児ではひとり・傍観・並行・連合・協同遊びのいずれも高い割合で発展しているが、3・4歳児では並行・連合遊びを中心に展開されている。

パーテンの遊びの種類は、人間関係を基軸にして遊びを分類していることから、認知的に遊びを分類したピアジェの遊び種類と比較すると、より年代による変化が見られる結果につながり、年齢相応の楽しみ方にそれぞれ発展したといえる。

一方、ピアジェの遊び分類の視点から言えば、感覚遊びの最適水準を超えた年長になっても、保育者からの自然教育により草花に対する素晴らしさを再認し、感覚遊びを通して五感や感性を育むことは、非常に重要である。情報化や効率化が進む現代社会では、幼児期でもDVDやタブレット等を使用した教育が行われることも多い一方で、近年「マインドフルネス」の重要性が指摘されている。マインドフルネスとは「今ここでの経験に、評価や判断を加えることなく能動的な注意を向けること」(Jon Kabat-Zinn, 1994)¹⁸⁾であるが、意識的に行うことにより、心身の健康や人生を生きる意味を進化できるとも言われる。五感をフルに使用する草花遊び等自然とのふれあいは、マインドフルネスの視点からも非常に重要であると考

えらえられる。これらより、草花遊びはどの年齢クラスにおいても平等に展開できると同時に、発達に合わせた展開や深化が可能な、伸びしろの広い、非常に万能な遊び方であると言えるだろう。

今後は、遊びの形態別にデータ数を増やししながら、発達の評価をさらに精緻化させること、さらに、都市部との比較を行うことで、環境や経験が保育者の教育手法に与える影響をより客観的に分析し、保育者教育の在り方に関する具体的な提言を行うことが課題である。

注

(注1) 著者らが、岐阜県東濃地域の保育者を対象に、自由記述を求める質問紙調査を行い、KJ法を用いた分析を行った結果(岐阜県民俗音楽学会誌第121号)による。

(注2) 同上

謝辞

本研究を進めるにあたりまして、ご協力いただきました岐阜県東濃地域の保育施設の先生方に感謝し、深く御礼を申し上げます。

引用文献

- 1) ジャンピアジェ著・大伴茂訳：“遊びの心理学(幼児心理学)”黎明書房, 1988-11
- 2) Parten, M.B. :“Social participation among pre-school children. Journal of Abnormal and Social Psychology, 27”(3), 1932
- 3) 文部科学省：“幼稚園教育要領”フレーベル館, p.19, 2017-5
- 4) 厚生労働省：“保育所保育指針”フレーベル館, p.19, 2017-5
- 5) 森上史朗・柏女霊峰編者：“保育用語辞典第7版”ミネルヴァ書房, p.118, 2013-4
- 6) 森上史朗・柏女霊峰編者：“保育用語辞典第7版”ミネルヴァ書房, p.119, 2013-4
- 7) 森上史朗・柏女霊峰編者：“保育用語辞典第7版”ミネルヴァ書房, p.119, 2013-4

参考文献

- 1) 白石正子：“幼児期における環境教育に関する一考察”宇部短期大学学術報告(36), pp.47-54, 1999-9
- 2) 武藤隆：“知的好奇心を育てる保育 学びの三つのモード編”フレーベル館, pp.121-147, 2001-2

- 3) 岡崎善治・深谷博子：“保育内容「環境」における草花遊びのねらいと草花楽器の活用実態について—発達の視点を通じた分析—”, 岐阜県民俗音楽学会会誌第121号, pp.2-4, 2019-8
- 4) 田尻由美子・林幸治：“「自然と関わる保育」の実践的保育指導力の要請について(1) :—保育者養成校の教員の考えや教育の実態に関する調査研究”精華女子短期大学(JSWJC)研究紀要(30), pp.31-42, 2004-3
- 5) 佐藤英文・藤野耕平：“若い保育者の草花遊びと実践”鶴見大学紀要第3部, 保育・歯科衛生編第(49), pp.17-26, 2012-3
- 6) 前迫ゆり：“環境領域の保育活動と保育者養成における自然環境教育”奈良佐保短期大学紀要(14) pp.63-81, 2006-3
- 7) 前掲3)
- 8) ジャンピアジェ著・大伴茂訳：“遊びの心理学(幼児心理学)”黎明書房, 1988-11
- 9) Parten, M.B. :“Social participation among pre-school children. Journal of Abnormal and Social Psychology, 27”(3), pp.243-269, 1932
- 10) 松村京子：“中学生との交流が幼児の遊びに与える影響”小児保健研究64(2), pp.316-321, 2005-3
- 11) 中尾達馬・中原麻貴：“子どもたちは預かり保育中にどのような遊びを行っているのだろうか?—参加観察データに対するパーテン(1932)の遊びの分類基準を用いた分析—”山口学芸大学研究紀要2010年創刊号, pp.113-130, 2010-3
- 12) 渋谷香奈子・藤吉正明：“環境教育のための草花遊びの重要性”東海大学教養学部紀要(37), pp.213-225, 2006-3
- 13) 文部科学省：“幼稚園教育要領”フレーベル館, p.19, 2017-5
- 14) 厚生労働省：“保育所保育指針”フレーベル館, p.19, 2017-5
- 15) 文部科学省：“幼稚園教育要領解説”フレーベル館, pp.1-384, 2018-3
- 16) 厚生労働省：“保育所保育指針解説”フレーベル館, pp.1-472, 2018-3
- 17) 無藤隆・高橋恵子・田島信元：“発達心理学入門 I 乳児・幼児・児童”東京大学出版会, pp.147, 1990-2
- 18) Jon Kabat-Zinn: “Mindfulness meditation in everyday life: Whenever you go, there you are.” Hyperion, pp.113-130, 1994-1

付表1 草花遊び分類表

草花遊びの大分類	No.	草花遊びの分類	内容	材料となる草花名の例
勝負	1	相撲	花茎どおして引っ張り合いをし、相手の花茎を切る／花茎を取り、花を引っかけたり、ぶつけ合ったりする。	オオバコ、タンポポ類など
	2	四つ葉のクローバー探し	4枚の葉のシロツメクサを探す。	シロツメクサ
	3	どこついた?	茎の一部を切った後元に戻し、どこをつないだかをあてる。	スギナ(ツクシ)など
	4	ハルジオンの落下傘ピン!	茎についたままの花を片手で持ち、親指ではじくように飛ばす。	ハルジオン
	5	じゃんけん	カエデなどをパー、イチヨウなどをチョキ、コナラなどをグーとし、じゃんけんをする。	カエデ・イチヨウ・コナラなど
	6	くじ引き	マツ葉を数本手に持ち、2本繋がっているものを当たりとする。	クロマツ・アカマツなど
飾り	7	指輪	1本の花柄を指に巻く。	シロツメクサなど
	8	首飾り	花弁を糸でつなぎ、首飾りにする。	サクラなど
	9	かんざし	2本1組のマツ葉の1本を、もう1本の先端に薩。そこに数本のマツ葉をかける。	クロマツ・アカマツなど
	10	かんむり	シロツメクサを重ねながら巻いていき、輪にしてかんむりにする。／花茎に穴をあけ、別の花茎をさす。そのようにしてたくさんつなぎ輪にする。	シロツメクサ・タンポポなど
	11	めがね	2本1組のマツ葉を「P」の形になるようにさし、輪の部分に唾液で膜をはる。	マツバなど
	12	お面	葉に目・鼻・口が見えるように穴をあける。	ギンギンなど
創作	13	ウサギ	耳を残すように余計な歯を落とし、目の部分に穴をあけてお面にする。	ヤツデなど
	14	帽子	葉を二枚重ね、茎の部分を輪ゴムでとめて頭にのせる。	ヤツデなど
	15	人形	タンポポの花を頭にして、タテに二つ折りにしたギンギンの葉などの着物を着せていく。	ギンギンなど
	16	ニワトリ	3枚のくっついている葉を用いてニワトリをつくる。	ササ類など
	17	カメ	2本1組の葉で輪を作り、先端をさしてとめる。そこに互い違いに松葉をさし編んでいき、最後にはみ出た葉の長さを切りそろえる。	クロマツ・アカマツなど
	18	魚	2本1組のマツの葉の先をさし輪にする。中心にもう1本のマツ葉を通す。	クロマツ・アカマツなど
	19	あめ	茎が付いたままの葉の1枚を三角に折ってあめを作る。最後は茎をさして留める。	ササ類など
	20	せんす	茎を付けたままの葉を用意し、葉の茎の近い部分を切っていく。	シュロなど
	21	ホース	花茎をホースのように両端を重ね合わせてつないでいき、長くする。	タンポポ類
	22	はさみ	花茎の両端を爪で2つにさき、そこだけを水に浸し反りかえりかえらせて、はさみの持ち手にする。	タンポポ類
音	23	ぞうり	葉のふちに沿って半分だけ切り込みを入れ、逆側に穴をあけ葉柄をさしこむ。2つ作る。	ツバキなど
	24	虫かご	ツバキなどの葉2枚を天井・底とし、マツ葉数本を縦にさしてつなぐ。	クロマツ・アカマツなど
	25	くさり	2本1組のマツ葉の先をさして「D」の形にし、何個も組み合わせて長くする。	クロマツ・アカマツなど
	26	葉っぱのこすりだし遊び	葉の上に薄い紙をおいて、鉛筆でこすると葉の模様が浮き出してくる。	常緑・落葉広葉樹
	27	汁で絵を描く	茎を折った時に出る橙色の汁で紙に絵を描く。	タケニグサなど
	28	笛	ウグイス形の笛を作る／5センチくらいに切った花茎の一方を平らにしてふくと「プー」と音が出る。／葉を横にしたときの上はしが上唇にかかるようにあて笛を吹く。	タケ、タンポポ、ツバキなど
	29	マラカス	上下に節をつけて切ったタケなどに穴をあけ、大豆や小石などを入れてゴムテープで穴をふさぐ。	タケ類
	30	でんでんたいこ	輪切りにしたタケの両側をクラフト氏でふさぎ、先に大豆をつけた糸を2本側面につける。細い竹を下に差し込み持ち手にする。	タケ類
	31	シャラシャラ	茎から離れないように果実を茎からはがしていき、振ると音が鳴る。	ナズナなど
	32	水草	5センチくらいに切った花草の両端に切り込みを入れ、水につけて両端を反り返らせる。	タンポポ類
おもちゃ	33	ササ舟	葉の両端を折り、それぞれ2か所の切り込みを入れ、外側の切れ端同士を重ねあう。	ササ類など
	34	ボール	花茎をタコ糸でたくさん組み合わせボールをつくる。	シロツメクサなど
	35	おいでおいで	葉を一枚とり、筋が切れないように葉の細い部分に2か所切れ目を入れ、切れ目より下の茎を切り捨てる。残った茎をそっと下へ移動させ、中の筋を引くと葉が動く。	オオバコなど
	36	やに遊び	樹液を指でとり、葉をむしった後、ねばねばさせて遊ぶ。	サクラなど
	37	刀	先端から長さ3分の2の部分に切り込みを入れる。長い方の部分の外皮を石でたたくと、芯の部分が抜け、さやと刀ができる。	マサキなど
	38	シャボン玉	1本の葉を輪にして先をさし、シャボン液をつけて吹く。	クロマツ・アカマツなど
	39	器	花の中に小さな花や葉を入れて器にする。	アサガオなど
ままごと	40	ひしゃく	節を底にしてひしゃくの大きさに切る。木の枝の先を削って斜めにさし持ち手にする。	イタドリなど
	41	ジュース	5-6個の花を布に包んでしぼり、ジュースにする。	アサガオなど
	42	巻きずし	タンポポやシロツメクサの花びらを包むようにササの葉をまく。最後は松葉でとめる。	ササ類など
	43	グリーンティー	石などですりつぶした葉を水の中に入れる。	ヨモギなど

※渋谷・藤吉(2006)を参考に著者が作成